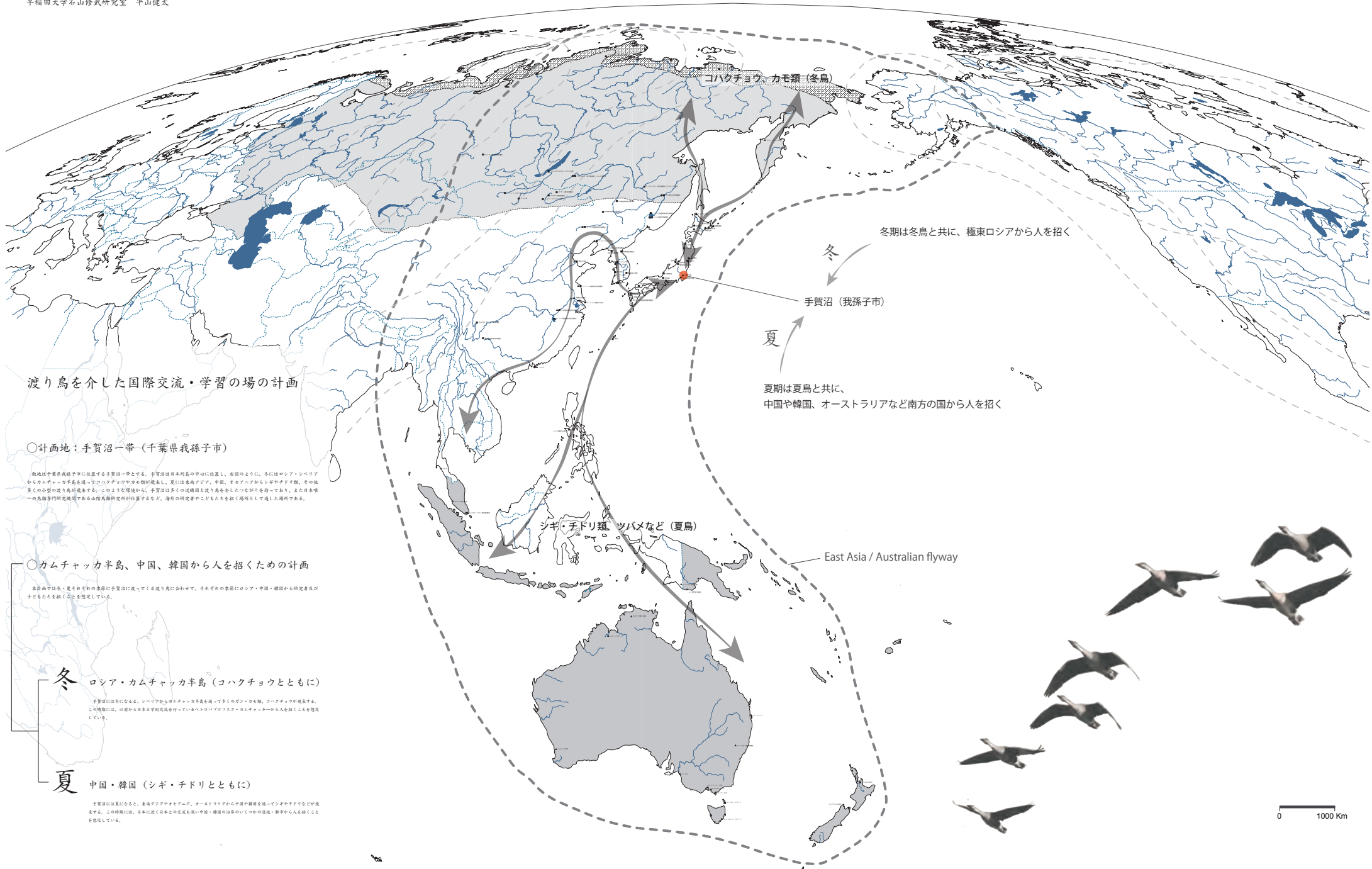
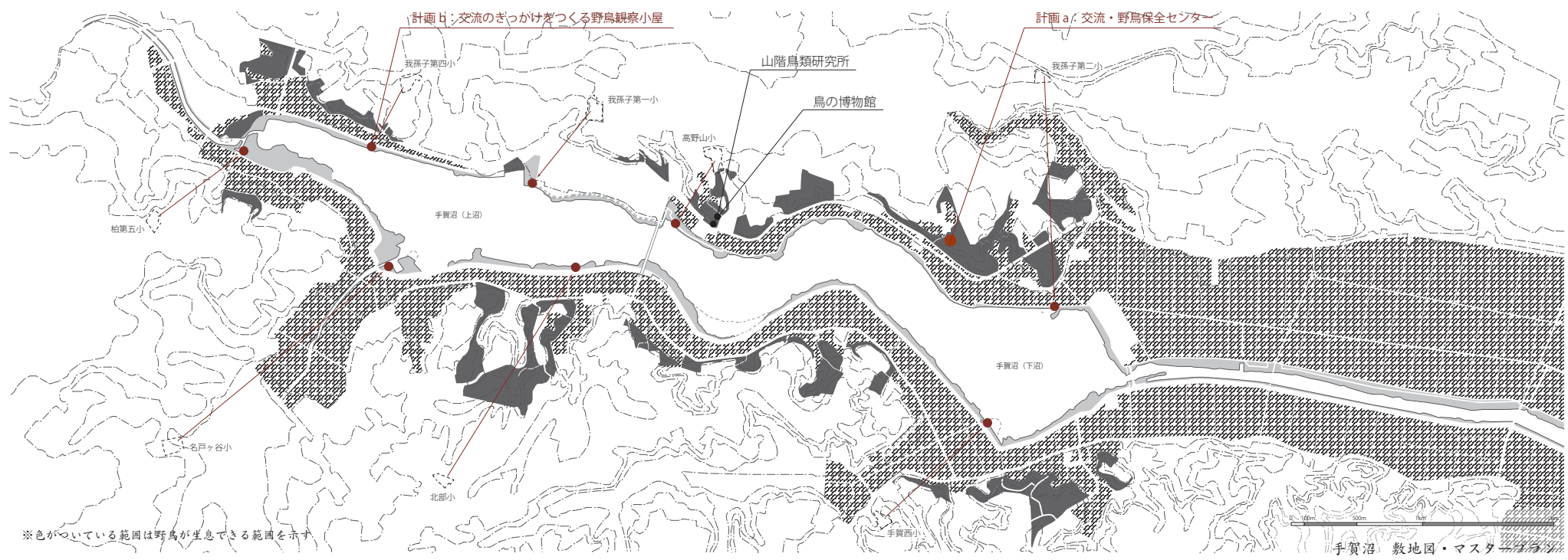


# 渡り鳥を介した国際交流

早稲田大学石山修武研究室 平山健太



# 手賀沼で見られる73種の野鳥とその分布（マスタープランの下敷きとして）





# 計画 a: 交流・野鳥保全センター

本計画のコア施設となる交流・野鳥保全センターは、森の中（自然の中）でのワークショップや交流・学習会を継続する最低限の機能によって設計した。本施設は手賀沼を訪れた外国人、国境住民が利用するだけでなく、野鳥の交差のための空間も持つ。

交流・野鳥保全センター／立面パース



## 生物と建築を同じ世界観の中に見ること - 近代への批判的まなざしとして

生物と建築を同じ世界観の中に見ること、それは近代への批判的まなざしである。

南方熊楠は、あらゆる生物の存在を自分の世界観の中に織りまわすようとし、そして実現した人物であった。熊楠の視線は鳥や動物などの目につきやすい存在を越えて、植物と動物の間、微細な生物の輪郭ともいえる範囲にまで拡大していった。生を持つあらゆる存在がうごめくその世界観は、近代によって作り上げられた私たちのもの見方は、対極に位置するものである。本計画の根底にあるテーマは、南方熊楠に学び、生物と建築を同じ世界観の中に見ることにある。



南方熊楠 (1867 - 1941)

「交流・野鳥保全センター」は本計画のコア施設となる計画物である。「山階鳥類研究所」及び「武蔵野鳥の博物館」から東へ1.5kmに位置する森林公園内を計画地としている。また、本施設の運営も「山階鳥類研究所」及び「武蔵野鳥の博物館」と連携して行われることを想定している。

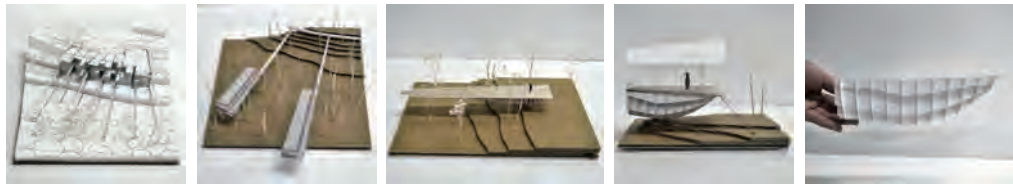
### 「交流・学習センター棟」

約163㎡。「交流・学習センター棟」は他園から招待した研究者や子どもたちが小さな交流会や催し物を行う時に使えるスペースとして計画している。ワークショップスペースと野鳥に関する本を所蔵する小さな図書館・学習スペースが設置される。

### 「野鳥・環境保全センター棟」

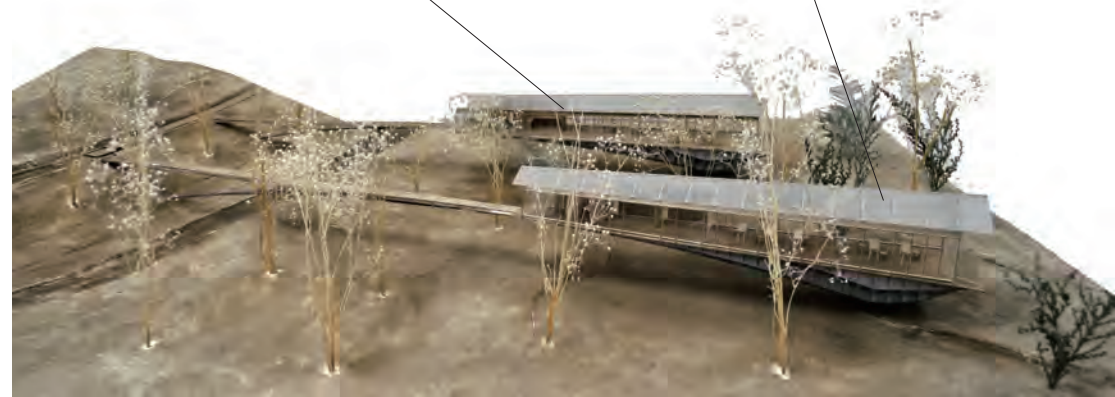
約163㎡。「野鳥・環境保全センター棟」は森林公園を中心とする近郊の自然の保全活動の拠点となる施設である。森林公園の管理人（パーク・レンジャー）が駐在するための場所であり、本計画の運営の事務所棟も兼ねている。

## 地面（自然）を削らない“接地の仕方”のスタディ過程



第1案：斜面に深まったボリュームと森に突入する機構  
第2案：森の中に突入していく細いボリューム  
第3案：引きながら出る屋とつながる建物のボリュームへ、建物の傾斜の体積の調整、軸の傾斜を考慮して、一点で接地する。  
第4案：なるべく自然を削らない建物のカタチ、森を削らずに一体化し、一点（置き基礎）で接地する。  
第5案：床下の構造体のふとこを空間をつくり、野鳥の営みに利用できる空間とする。

自然の中になつて建築は、どのような手つきで地面（自然）に触れるべきか。森の進歩道に増築する様に計画した本施設では、「いかにして地面（自然）を基礎で削らずに建つか」という建築の建ち方が最も重要なテーマであると考え、そのスタディを行った。本施設の接地の方途をその問いへの答えとしてデザインした。スタディ過程には、まず計画敷地である公園の斜面から森の中へ伸びる機構を持つ形態から始まり、次に斜面にボリュームを廻るものではなく森の中に浮くボリュームとする案に進んだ。この案では浮いたボリュームを支える柱とその基礎が由できてきたことが問題であった。最終的に、その柱を解消するために軸の年々構造体を用いることで、置き基礎を介して一点で地面と接地する案とした。また、この構造体の内部に空間を持たせることで、森の中で野鳥に営みに利用できる空間を与えるものとした。



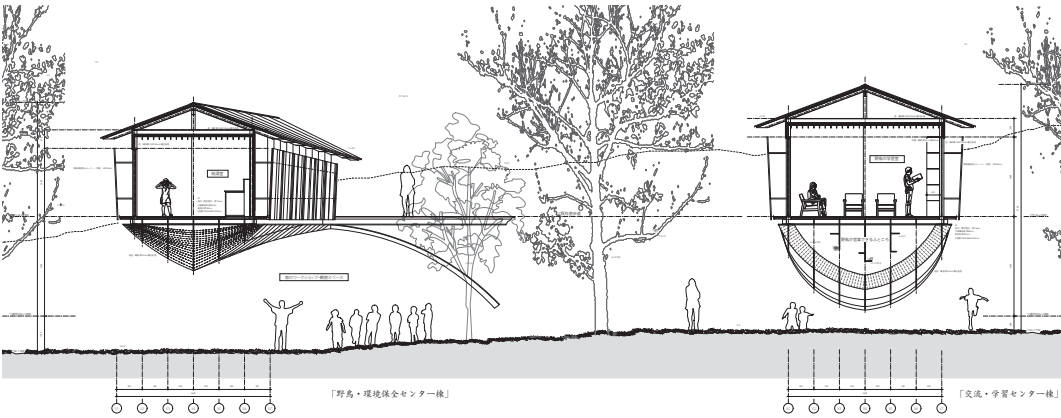




交流・野鳥保全センター a1' Section

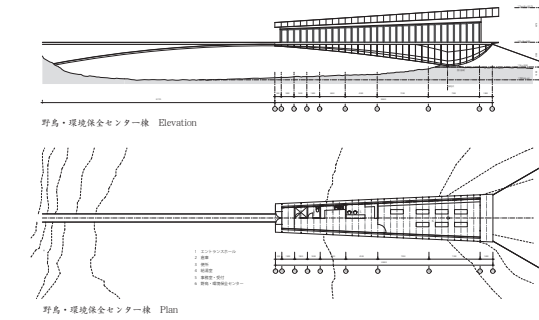


本施設は手賀沼湖畔に位置する日本唯一の鳥類専門研究機関である山形鳥類研究所から、東へ1.5kmの森林公園内に位置する。計画地はかつてまだ沼の面積が広がった頃、実際に位置していた場所である。



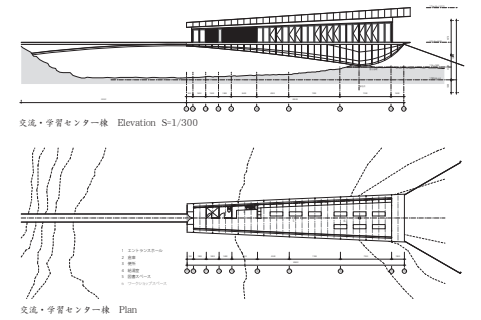
「野鳥・環境保全センター」線

「交流・学習センター」線



野鳥・環境保全センター線 Elevation

野鳥・環境保全センター線 Plan



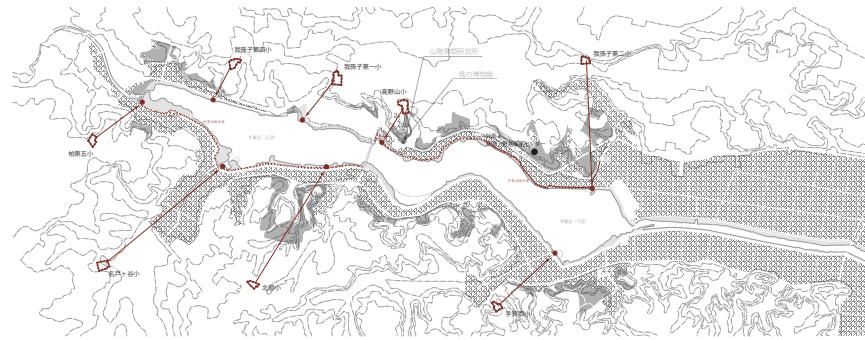
交流・学習センター線 Elevation S-1/300

交流・学習センター線 Plan

## 計画 b: 交流のきっかけをつくる野鳥観察小屋

8つの小屋は各小学校がそれぞれ管理し、それぞれのエリアの水辺環境の保全に責任を持つ

計画として、交流のきっかけをつくる8つの小屋を計画した。手賀沼を取り巻く緑に立地する8つの小学校に、それぞれの領域として、湖岸の観察小屋を与える。また、各小学校はそれぞれの小屋の管理・小屋の周辺の水辺環境の保全に対して責任を持つこととする。この小屋は各学年やここを離れた地域人が利用する鳥の観察小屋であり、各校の環境保全の拠点となる。毎年、各小学校が受け持つエリアのヨシ刈りや国際交流ワークショップの一環として行い、刈り取ったヨシは小屋の外壁に収め、乾燥させる。一本乾燥させたヨシは次の夏、更に異国からやってきた小学生らと鳥小屋製作ワークショップの材料として活用する。



手賀沼 8つの小屋と小学校 配置図

8つの小屋の例: 手賀西小が管理・保全する観察小屋 (冬)



毎冬のヨシ刈り国際ワークショップと、ヨシをまとう小屋の姿は冬の風景に

毎年国際ワークショップの一環としてヨシ刈り（水辺の環境保全）を行い、小屋の外壁で乾燥させる  
 ⇒ 小屋の断熱材として、更に、一本乾燥させたヨシは夏の鳥小屋製作ワークショップの材料として利用する。